

国語科

国語科部 前原 聡 中島 璃子 田島 友香
研究協力者 濱田 秀行

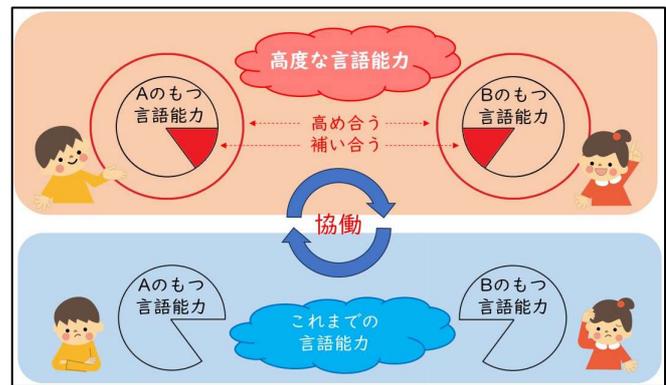
1 国語科における「教科本質的な学び」について

言葉のもつ特性に着目しながら認識・思考・表現を繰り返し、言語能力を高める学び

国語科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「言葉による見方・考え方」である。これは、認識から思考という理解の過程と、思考から表現という表現の過程の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等の言葉のもつ特性に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。この見方・考え方を踏まえ、国語科の教科本質的な学びを「言葉のもつ特性に着目しながら認識・思考・表現を繰り返し、言語能力を高める学び」とした。本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、国語科の教科本質的な学びが欠かせない。私たちは言葉を通じて、自分の意思や主張を伝えたり、他者の意図や感情を読み取ったりする。予測困難で不確実な時代において、最適解や納得解を導いていくためには、多様な考え方や価値観をもった他者と伝え合い、相互理解を深める高度な言語能力が求められる。現代社会における諸課題の解決に向けて、国語科の学習を通して高めた言語能力を基に、他者と関わることによって、共によりよく生きていくことができる生活を創造していくことができる。

2 研究の方向

国語科の教科本質的な学びは「言葉のもつ特性に着目しながら認識・思考・表現を繰り返し、言語能力を高める学び」である。この教科本質的な学びにおける他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、自他の言語能力を補い合い、高め合うという意味をもつ。(図1) 国語科の問題解決的な学習において、出合った言葉と、これまでの自分もっていた、対象と言葉、言葉と言葉との関係を基にした考えとの間に、差異が生まれることがある。この差異を認識することで、自分の言語能力の欠けているところや不十分なところを自覚することができる。この際、自他の対象と言葉、言葉と言葉との関係を基にした考えを聞き合うことで、自分では捉えられなかった対象と言葉、言葉と言葉との関係に気付くことができ、言語能力を補い合うことができる。また、自分が捉えた対象と言葉、言葉と言葉との関係を問い直すことができ、言語能力を高め合うことができる。したがって、国語科の学びの中で、非認知能力である「他者と協働する力」は、自他の言語能力を補い合い、高め合うことに向かって発揮される。



＜図1 自他の言語能力を補い合い、高め合うイメージ＞

ここで、国語科の教科特性に着目すると、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全ての領域において、一人でスピーチの準備をしたり、作文を書いたり、文章を読んだりするなど、言語活動に没頭する姿や、他者と考えの伝え合いに終始してしまう姿が現れることがある。日常生活で言葉を使っているため、国語科で設定する学習課題も、自分一人で解決できたり、満足したりしてしまうからであると考えられる。これらの姿は、自分なりに言葉による見方・考え方を働かせながら、認識・思考・表

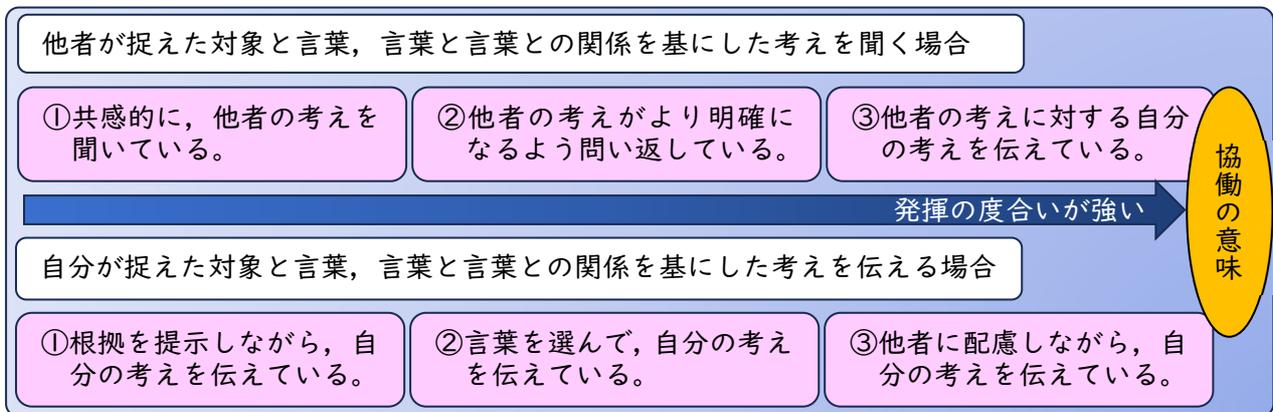
現を繰り返して言語能力を高める姿であるものの、他者と言語能力を補い合い、高め合うことで、より高度な言語能力に高められていない姿である。これらのことにより、さらに自他の言語能力を補い合い、高め合うために、自他の考えを価値のあるものであるという思いを高めることが必要になると考える。

そこで、子どもたちが、教科本質的な学びの中で、他者の考えを価値のあるものとして聞き合うことで、自他の言語能力が高まる学びを実現し、「他者と協働する力」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 「他者と協働する力」が発揮された姿

他者の考えを価値あるものであるという思いが高まった子どもは、自分の考えをよりよくするために、他者の考えを受け止めようとしたり、考えの根拠を引き出そうとしたりするなどの聞く立場の姿が現れると考えた。また、価値ある他者の考えをよりよくするために、他者の反応を意識しながら自分の考えを伝えたり、表現を工夫したりするなどの伝える立場の姿が現れると考えた。



考えを聞く場合の①の姿は、相手の考えを聞く際に、相手を見たり、頷いたりする姿である。この姿は、他者の考えを聞きたいという思いがあるため、他者が指し示す根拠を見たり、聞いたりするだけでなく、他者の考えを受け止めようとしている姿と考えられる。②の姿は、「もっと詳しく教えて」「例えば、どういうこと」などと、相手の考えのよさを見付けようとしている姿である。この姿は、他者にも考えがあることを前提としながら、他者の考えを理解したいという思いがあるため、納得できるまで聞くようとしている姿と考えられる。③の姿は、相手の考えを聞いた後に、それに対する自分の考えを伝える姿である。この姿は、他者の考えを価値あるものであるという思いが高いため、自分が受け取ったことを他者に返している姿と考えられる。

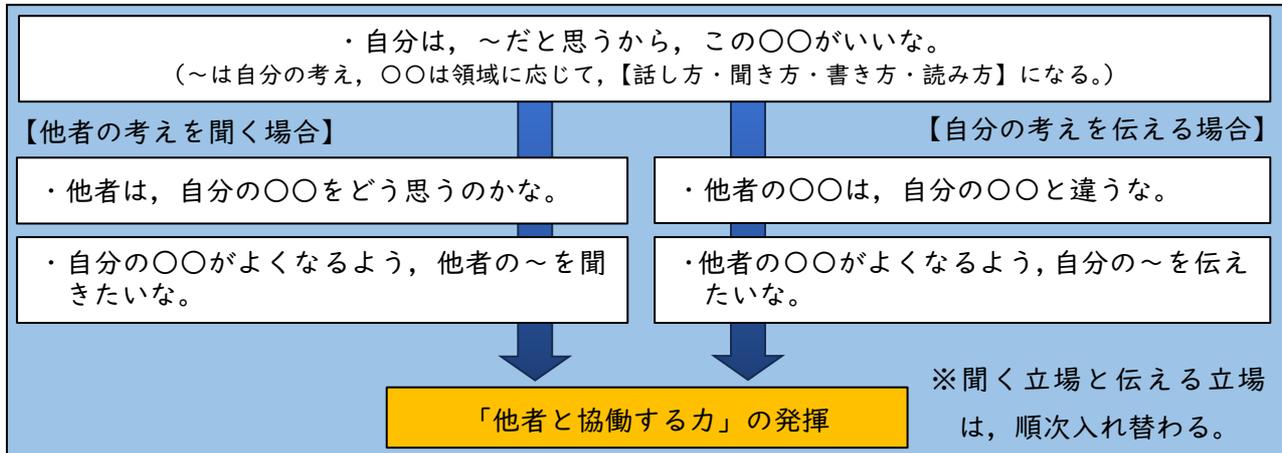
考えを伝える場合の①の姿は、自分の考えを伝える際に、根拠を指し示したり、図示したりする姿である。この姿は、他者も自分の考えを聞きたいと思っているから、自分の考えをはっきりと他者に伝えたいという思いがあるため、考えの根拠も伝えようとしている姿と考えられる。②の姿は、表現を工夫したり、繰り返し伝えたりする姿である。この姿は、他者にも考えがあることを前提としながら、納得してもらいたいという思いがあるため、表現を工夫しながら伝えている姿と考えられる。③の姿は、「どうかな」などと他者に理解度を問いかける姿である。この姿は、他者の考えが価値のあるものであるという思いが高いため、相手の受け取り方を尊重しながら自分の考えを伝えている姿と考えられる。

考えを聞く場合も、伝える場合も、③の姿は、自分の考えと比較したり、関連付けたりして、対象と言葉、言葉と言葉との関係を問い直し、考えを広げようとしている姿と考えられる。他者の考えを価値のあるものとして聞こうという思いが高まっている子どもは、自分の考えを伝えたり、聞いたりするだ

けでなく、他者に配慮しながら伝えたり、他者の考えに対する自分の考えを伝えたりする。そして、対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりすることができ、考えが広がり、言語能力を補い合い、高め合うことができる。

(2) 学びのプロセス

本校国語科の「他者と協働する力」が発揮される子どもの姿が現れるまでの子どもの意識を、以下のように捉えた。

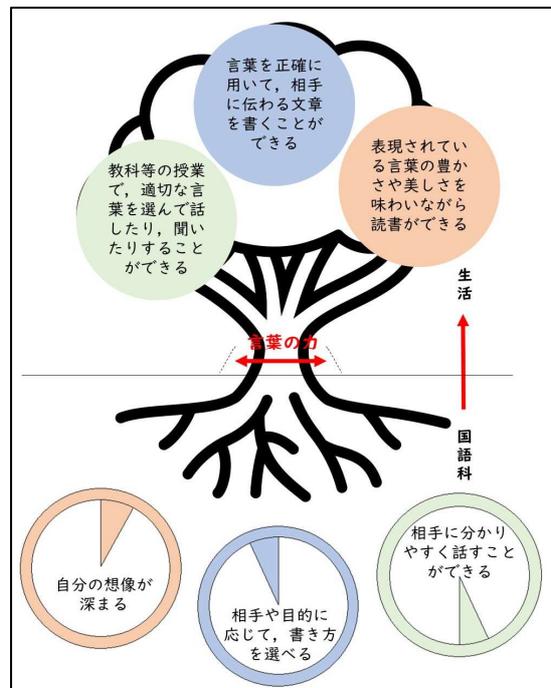


(3) 学びのデザイン

① 教科本質的な学び

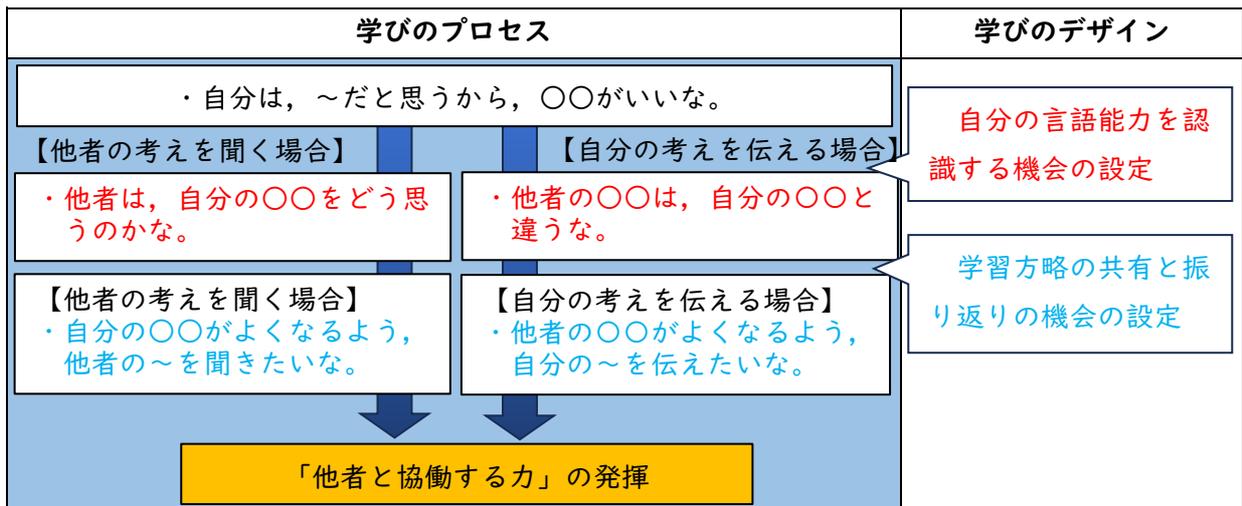
国語科の教科本質的な学びを踏まえ、国語科を学ぶよさを子どもたちと各学期の始めに、掲示物で共有する。(図2) 国語科を学ぶよさを、「言葉の力を広げ、伸ばし、言葉によって生活を豊かにすること」と捉えた。ここでの生活とは、実生活や他教科等での学びを指す。また、国語科における学びにおいて、友達の考えの根拠を問いかけ、対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりすることを学習方略として捉えた。さらに、言葉の力がさらに広がったり、伸びたりすることを伝えていく。このように、国語科における協働的に学習する意味を、お互いの言葉の力を広げたり、伸ばしたりできることとして位置付けた。

この学ぶよさを、【つかむ】過程では、提示することで、本単元で高めたい言語能力を、学級全体で共通理解できるようにする。【ふかめる】過程では、自分なりの考えをもった後に再提示することで、協働する意味を意識しながら、他者と関わることができるようにする。【ふりかえる】過程では、単元の前後での自分の考えの変容を、国語科を学ぶよさと照らし合わせて、単元の学習を振り返ることができるようにする。



<図2 国語科を学ぶよさの例>

②プロセスを基にした学びのデザイン



単元末を見据えて、自分の言語能力を認識する機会の設定

子どもが自他の考えの差異に気付いたり、自分の考えに対する他者の受け止め方を意識したりできるようになるためには、学習課題の解決が自分一人では困難であることや、他者と協働すると言語能力がより高まることを自覚することが必要である。そこで、単元末を見据えて、自分の言語能力を認識する機会を設定する。具体的には、【ふかめる】過程において、子どもが書いたり、読み終えたりしたところで、クラスの友達を、単元を通した言語活動で設定した相手と仮定して、単元末と同じように実施する。この際、子どもたちが自他の言語能力を相互評価できるよう、教師は、事前に評価の観点を設定しておく。なお、発達段階に応じて、観点に照らして適切に評価することが難しい場合もあるため、友達ではなく保護者や教師など、大人を相手とすることも考えられる。

具体例 2年「おもちゃのせつめい書を作ろう」

（『馬のおもちゃの作り方』『おもちゃの作り方をせつめいしよう』光村図書2年下）

学習課題：「文の続きに気を付けて、おもちゃの作り方を1年生に紹介しよう」

- ・子どもが、説明書を書いたタイミングで、互いの説明書を読み合い、実際におもちゃを作る機会を設定する。
- ・自分の文章を音読したり、ペアの友達と文章を音読し合ったりして、1年生が分かりやすい内容になっていないところに、赤線を引くよう促す。

6 cm から 7 cm の間ということだと、1年生には分かりづらいと思うよ。

どうして「7 cm くらい」に線を引いたの。

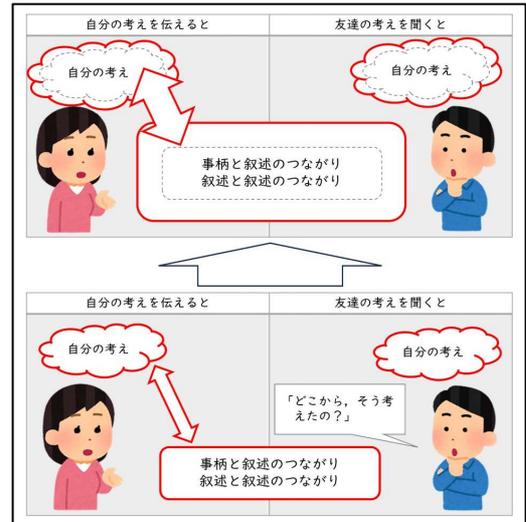
そうか、「7 cm くらい」だと1年生は悩むのかもな。
（自他の考えの差異の気付き）

他の友達は、どう思うのかな。
（自分の考えに対する他者の受け止め方の意識）



学習方略の共有と振り返りの機会の設定

子どもが、他者の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりしたいという思いを高めるためには、友達の考えの根拠を問いかけることが、対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりすることになり、自他の考えをよりよくしていくことになることを自覚する必要がある。そこで、学習方略の共有と振り返りの機会を設定する。具体的には、【ふかめる】過程において、自分なりの考えをもった後に、**図3**のような学習方略を提示して、友達の考えの根拠を問いかけることが、対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりすることになり、自他の考えをよりよくしていくことになることを伝える。また、本時の終末で、学ばよさとともに提示して、友達との関わりによる、学習課題の達成状況を振り返る。



<図3 国語科における学習方略>

具体例 5年「すぐれた表現に着目して読み、物語のみりよくをまとめよう」

(『大造じいさんとガン』光村図書5年)

友達が感じたことを聞くだけでなく、「どこから、そう考えたの」と、根拠を問いかけましょう。自分にはない読みに気付いたり、友達も自分一人では気付かなかった言葉と言葉のつながりを見付けたりすることができます。



「これも、あの残雪が、仲間を指導してやったにちがいません。」の「あの」から、大造じいさんが残雪のよさを考えていることが分かると思うよ。

どこから、そう考えたの。



「いまいましていました。」とあるけれど、それだけでは「あの」とは言わないと思ったからだよ。

なるほど、大造じいさんが残雪に感心していることでもあるのだね。



4 成果と課題

本校国語科における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

【ふかめる】過程において、自他が捉えた対象と言葉、言葉と言葉との関係を基にした考えを聞き合う姿が見られた。これは、学びのデザインで自分の言語能力を認識する機会を設定したことで、他者の自分の成果物に対する評価を確かめたいという思いを高めることができたためであると考えられる。また、対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり問い直したりすることを学習方略として共有したことで、一部の子どもは、自分の成果物がよりよくなるよう、友達の感じたことを聞くことができたためであると考えられる。

○課題

子どもの、友達の感じたことを聞きたいという思いを高めるには、具体的な友達との関わり方を理解することが重要である。自他の言語能力を補い合い、高め合うために、考えを伝える立場でも、聞く立場でも、子どもが活用できる学習方略を構想していく必要がある。また、国語科を学ぶよさの図と関連付け、互いの言葉の力が広がったり、伸びたりしたことを、振り返ることで、次の学習での「他者と協働する力」が発揮されることにつながっていくことも検討したい。

【参考文献】

中央教育審議会答申「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」、2016年。

OECD教育研究革新センター『創造性と批判的思考—学校で教え学ぶことの意味はなにか』、明石書店、2023年。